
きみのかおり。

みまん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみのかおり。

【Nコード】

N2162F

【作者名】

みまん

【あらすじ】

無邪気な彼女と僕のある午後。僕は彼女の匂いが大好きで、彼女のベッドに寝転がっていたのだが…。ちよびつと甘めな僕と彼女のストーリーです。

（前書き）

初めて。みまんと申します。初めての作品で至らない点もたくさんあります。ですが、お楽しみいただけたらなあ……、なんて願っています。それでは。

「うはぁ……………」

僕は大きく息をついた。

「ちょっとお。勝手に人のベッドにあがらないでよぉ！」

「だってえ……………」

「だってじゃないのー」

彼女の寢床は2段ベッドの上。

僕は彼女の家にあがる度にこの場所にきてしまうのだ。

だって、

「…いい匂い……………」

この狭い空間には、大好きな彼女の匂いが溢れている。
僕は枕に顔をうずめた。

「…前から気になってんだけどさぁ」

「んー？」

「…どんな匂いがしてるんですかねえ？」

「……………い、いい匂い…」

「答えになってないよ」

くすくす、と彼女は笑う。

僕は、だつて…、といって口を閉じた。

「ほら、降りて？もう時間だから」

彼女は僕が下に置いてきてしまったケータイをいじりながら言う。
彼女の家にもいいと言われたのはたしか18時までだったな、
と思い出した。

今は、17時45分。

彼女は僕のケータイのロックを解除しようと頑張っている。

近くにあった抱き枕をぎゅっと抱き締めた。
ふんわりと彼女の匂いがして幸せな気分になる。

「ほら、降りなさい」

さつきより強い口調で彼女が言う。

「……………」

抱き枕を離して仰向けになり、瞳を閉じた。

狸寝入りである。

「あ」

彼女はそれに感付いたように声をあげ、立ち上がったようだ。

みしみしと2段ベッドの梯子の軋む音がして、僕の足元のほうのマットが少し沈む。

「寝ちゃったんですかぁー？」

わざとらしく彼女が聞く。

僕は何も言わないが。

「おーい、起きろぉー」

彼女は人差し指で、僕のふくらはぎを足首のほうからつつつ、と優しくなぞる。

くすぐりたい。

「……あつ……」

声が漏れてしまった。

僕はただでさえくすぐりに強いほうではないのだが、彼女の指はそういう魔法でもかかっているかのように僕をくすぐったく、気持ち良くさせる。

「んー？どおしたのかなぁ？」

なんだこいつは。

彼女は天性のサディストなのだろうか。
つつつ、とのぼってきた指は、いつの間にか僕の脇腹をなぞって
いて。

「…ふあっ……………」

僕は声を堪えられなくて。

「ほら、寝てないのはわかってんだから。起きて?」

彼女は僕の首をなぞりながら言う。

僕は瞳を固く閉じてからぶんぶんと首をふった。

「……………もう……………」

彼女は困ったように笑っている。
まんざらでもないようだ。

「…でもほらあ、お家の人とか心配しちゃうよ?」

僕はまた首をふる。

「…そっかあ……………」

そう言うとき彼女は黙り込んでしまった。

……………どうしたのだろう。

そう思っていたら彼女は僕の足元から頭のほうへ移動を始めた。

薄く目を開けてみた。

彼女はにやにやしながらこちらへ右手をのばしてきていた。

また瞳を閉じると、少ししてから僕の左の脇あたりのマットがぐつと沈んだ。

彼女の右手はいまここにあるのだろう。

「起きて、お寝坊さん」

こころなしに彼女の声は楽しそうだ。

すると急に左脇のマットがさらに沈みはじめた。
つまり彼女が僕のほうにかがみこんでいるのだ。

「んむっ!?!」

突然、僕の口は何かによってふさがれてしまった。

柔らかくて、あたたかくて。

なんだろう。

最初は彼女の指だと思った。
空いている、左手。

でも違った。

だって左手は僕の胸の上にあったから。

…もしかして、僕は恐ろしく鈍感なことをしてないだろうか。

一つの可能性にたどり着く。

心臓はばくばくと音をたてている。

顔は……。

わからないけど、きっと真っ赤なのだろう。

恐る恐る目を開けてみる。

クリーム色の天井。

まるい肩。

もさもさとした黒い髪。

思わず触りたくなるような耳。

すべすべで、きつとぶにぶにであろうほつぺた。

目の前に、それらはあった。

うん、間違いない。

僕は彼女にキスされていた。

初めての経験である。

どうしてよいかわからなくなった僕は、とりあえずもう一度、瞳を閉じてしまうことにした。

そのあと、どれぐらい時間は過ぎたのだろうか。

僕の口は、あのあつい、柔らかいものから解放された。

僕は薄く目を開けた。

彼女はまぶしいばかりの笑みを浮かべていた。

「ほら起きて」

彼女が優しく言ったから、僕は片目を開けてしまった。
たぶん、かなり鬱陶しそうな顔してるな、僕。

「顔、真っ赤だよ」

彼女がにやにやしていったので、僕は恥ずかしくなってしまった。

…わかってますとも、そんなこと……。

「……み、…見ないでくれ………」

僕は両手で顔を隠す。

ああ、なんと弱々しい声……。

すると両手首をがっと掴まれ、ひろげられてしまった。

…なんという力だ……。

「………ぜんぶ、…ぜんぶ見せてっ?」

少し恥じらったように、でも無邪気に、彼女は笑った。

反則だよ、その笑顔は……。

「…ん……………」

でも、やっぱり恥ずかしくて彼女の目は見られなくて、僕は斜め下をむいた。

「……………かわいい……………」

ぼそり、と彼女がつぶやく。

「…はあ！？」

そんなことを言われたのは初めてで、また僕の顔はさらに赤みを増していくのだろう。

「…好きだよ」

…そんなストレートに言わないでほしい……………。
僕には僕の心の準備というやつがあるのに。

少し間を置いてから、僕は口を開いた。

「…僕も……………」

心の準備、完了である。

よいしょ、と重い体を持ち上げて、彼女の両手首を持って、なるべく真剣に、かつ優しく、僕は言った。

「お前のことが、好きだ」

彼女はむふふふ、と笑った。

めったに顔が赤くなったりするたちじゃないのだ、彼女は。

まったく、ズルいやツめ。

と、僕はつぶやいた。

彼女は可愛らしく、にこにこ笑っている。

本当は押し倒してしまいたかったけど、ぐっと堪えて彼女を抱き締めた。

「ん……？」

彼女は不思議そうな声をあげる。

僕は彼女の首筋に顔をうずめた。

なんとも言い難い、あの独特の匂い。

甘いようでそうではなく、

香水のようでもあるけど、それにしてはすごく人においがする。

麻薬ってこんなかんじなのかなあ、と僕は思った。

彼女の匂いは、酷い中毒性を持っていた。

「んよいしょ」

「あっ」

彼女が僕をひっぺがす。

せつかく人がリラックスしてたのに…。

「さあ、もう帰ないと。うちも弟、帰って来ちゃうし。ね？」

うん、と仕方なく僕は頷く。

彼女は一足先にベッドから降りたようだ。

僕ものそのそと、そのあとに続く。

「心配しなくても、大好きだから」

梯子を降りた僕の耳元に背伸びをした彼女が囁いた。

「ん」

ぶつきらばうに返事をして、彼女の頭をなでなでしてやる。

猫みたいに甘える彼女は、まあそりやもつめちゃくちゃかわいく
て。

「それじゃあ…ね？」

サンダルを引っ掛けて僕は彼女を振り返る。

切ない。

「うんっ。じゃあねい」

僕の気持ちを知ってか知らずか、彼女は無邪気に笑う。

まあ、知らないんだろうけどさ。

ふう、と息をついてドアを開けた。

「またねっ」

最後に彼女が可愛らしく言ったので、全部許してしまおう。

（後書き）

いかがでしたか？ご意見・ご感想などありましたら、遠慮なくお願いします。それでは、読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2162f/>

きみのかおり。

2010年10月17日07時48分発行